慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	G. Downey, A history of Antioch in Syria from Seleucus to the Arab conquest
Sub Title	
Author	小川, 英雄(Ogawa, Hideo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1964
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.37, No.3 (1964. 11) ,p.117(359)- 122(364)
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19641100-0117

批評と紹介

G. Downey, A History of Antioch in Syria from Seleucus to the Arab Conquest, Princeton Univ. Press, 1958, xviii+752 pp., 21 plates.

小川英雄

（一）アンティオキァの研究史と史料

アンティオキァについて初めて総合的な著述をした近代の学者は Carl Otfried Müller (1797-1840) で、その作品 "Antiquitates Antiochenae," 1839 は古典的地位を占めて来た。この本の文献学的な材料の蒐集・操作が極めて優れていたことは、本書巻末の図（9）にある通り、実地調査なしにこの古代の町を正確に復元していることでも分る。しかし、その後これに匹敵する総括的な研究は、Downey のこの作品が現われるまで存在せず、評者の一人 S. I. Oost (JNES, 21, 1962, pp. 156-158) の云う通り、本書の価値は第一にその点にあると考えられる。

Downey と Müller の間には一世紀以上の時間的へだたりがあるが、その間に、第一にテキスト・クリティシズム、第二に考古学的発掘の上で種々の進歩が起つたのは当然である。

まず、古代のテキストを見ると、当市の初期の歴史、特に設立に関しては、まとまつた著作は失われてしまつて、後世の引用から知られるのみである。アンティオキァの史料として最も重要なものは、Johannes Malalas（後九世紀の年代誌家）、Libanius（後四世紀の修辞学者・政治家）、Julianus 帝（後三六三年当市滞在）、Johannes Chrysostomus（Libanius の弟子、キリスト教々父）、Evagrius（後六世紀の法律家、教会史家）等である。この人々の著作の傾向、目的は様々であるが、史料としてみるならば、総じて非歴史的であると云うことであつて、同時代についてはかなり詳しい事情を伝えているにも拘わらず、過去についてはさかのぼればさかのぼる程、単なる伝説や空想、信ずべきでない（或は互に矛盾する）史料の無批判な接合を行つていることが多い。従つて、この町の通史を書く場合、史料にむらがあつて、各時代の扱い方に史料上の密度のちがいが出て来るのは止むを得ない。即ち、後四世紀は Libanius の活躍した時代であつて、史料は最も豊富である。Downey はこの時代については、本書と殆んど同時に出た Paul Petit (Libanius et la vie municipale à Antioche au IVe siècle après J.-C., 1955; Les étudiants de Libanius-un professeur de faculté et ses élèves au Bas Empire, 1956) や A. J. Festugière (Antioche païenne et chrétienne, 1959) 等に詳細の説明はゆずり、それに対して他の時代の記述を史料の徹底的な活用によつて可能な限り引きのばし、それによつて各時代の均衡を保たせている。評書の一人 C. G. Starr (AJA, 66, 1962, p. 120) は著者のこの努力を称讃しているが、他方このことが本書の中心のなさ、単調さの原因ともなつている。Müller 以後、上記の

諸テキストを校訂したのは R, Förster (Libanius), W. Weber (Malalas) 等である。

次に、アンティオキァの考古学は上記のようなテキストの欠点の補いを含めて、この町の歴史に如何なる貢献をしたであろうか。当地の組織的発掘はプリンストン大学の Committee for the Excavation of Antioch and its Vicinity によるもの (1932–1938) で、報告書 "Antioch-on-the-Orontes" I–IV (Publications of the CEAV; I: The Excavations of 1932, ed. by G. W. Elderkin, 1934; II: 1933–1936, ed. by R. Stillwell, 1938; III: 1937–1939, ed. by R. Stillwell, 1941; IV-1: Ceramics and Islamic Coins, ed. by F. O. Waagé, 1948; IV-2: Greek, Roman, Byzantine and Crusades's Coins, by D. B. Waagé, 1952) が出版されている。

この発掘の最も大きい成果は後五世紀のものと思われるモザイクの床が、アンティオキァ近郊の丘にある Daphnē の森の民家及公共建築物から発見されたことで、当時の市民の生活や町の様子を知るのに大きな貢献をした。

しかし、Downey は本書の中では特殊なテーマについて詳しく論及することを、全体のプロポーションの上からさけたように見え、このモザイクの利用をごく一部にだけ（トポグラフィー及び若干の文化史的側面——異教イコノグラフィー等）に限つている。この種の通史にとつて美術史的問題がわずかしか出ないのは当然であるが、姉妹篇の "Ancient Antioch" (1963) では多数のモザイクの写真版と共に、特に一章 (Chapt. X, Fair Crown of the Orient) をもうけて一般向けに解説している。大部の方は専門家向けのものであるので、モザイクの精密な記述はその方面の専門家にまかせたものと思われる。(Cf. Antioch Mosaic Pavements, ed. Dora Levi, I: text; II: Plates, 1947: C. R. Morey, The Mosaics of Antioch, 1938) このモザイクを除くならば、発掘がアンティオキァ史の解明に果した役割はかなり小さなものでしかなかつたと云える。市街は一部が発掘可能なだけで、全容は未だ姿をあらわさず、本文中に出てくる建築物でも考古学的に確認されたものは半数にみたないようである。金石文学、古銭学、トポグラフィーなどの方面での若干の前進を考えにいれても、考古学の成果は、Oost の云う通り、文献史料の欠除を補つてはいない。(しかし、Starr は考古学的史料の欠乏を認めながらも、Downey のヒストリオグラフィーがあまりに文献学的であつて伝説と事実の単なる列挙をしている点と批判し、もつと考古学を応用して即物的な記述をした方がよいと考えているようである。)

（二）著者及びその業績について

著者の地位は Dumbarton Oaks Research Library and Collection of Harvard University のビザンティン文学の教授であつて、前記一九三二年の Charles Rufus Morey (Princeton University) によるアンティオキァ発掘の第一回シーズンに参加した。巻末の文献表にあげられている著者の論文は合計二十六あり、年代的には一九三七年以後、内容上ではイコノグラフィー、

建築から政治史、年代学、風俗習慣にいたるまで、ことごとくアンティオキァに集中して来た。

（三）著作の内容

（a）アンティオキァ地誌　アンティオキァの町は Orontes 川の左岸にある。河口の Seleucia Pieria より川は東北に向っているが、町の更に東北方向に肥沃な'Amuk平地とアンティオキァ湖がある。町は交通の要衝にあり、地中海岸の Seleucia 及び Laodicea、ユーフラテス方面の Samosata, Zeugma, シリア奥地の Chalcis, Hierapolis, Apamea, Emesa 等に道路がつながっている。町は西側の Orontes 川と東側の Silpius 山との間にはさまれていて、町に面する後者の山腹はなだらかである。十一月から三月頃までの雨期に植物が生育し、穀物の種播は十一月末から十二月、収穫は五月から六月にかけて行われる。町の南側 8 km の丘陵地 Daphne の森は泉永のゆたかな聖地であつて糸杉や月桂樹がしげっている、この森はアンティオキァと特に関係が深い。北側、河向うの 'Amuk 平地には大麦小麦、オリーブ、ブドウ、キュウリ、カボチャ、エンドウ豆、薬用植物等が産した。町中は本市と Orontes 川の川中島とによつて成り、各時代に拡大した（巻末 Plates, 3-11）。

（b）ヘレニスティク時代（pp. 54-142）。前三〇〇年 Antigonus の死後、Seleucos Nikator がその都市化政策の一つとしてシリアの要所に Tetrapolis（Seleucia Pieria, Antiochia, Laodicea, Apamea）を設置したのがはじまりで、当初は Pieria が首都であつたが、次代 Antiochus I Soter（281/0-261 B. C.）の代から、Antiochia が首都となり、そこで貨幣が打たれはじめた。この頃から人口が増大しはじめたらしく、Seleucus II Callinicus（246-226 B. C.）の代から Antiochus III Magnus（223-187 B. C.）の代にかけて、Orontes 川況いの最初の小入植地ではまにあわなくなり、川中島に新区域をもうけた。次に、Antiochus IV Epiphanes（175-136 B. C.）の代に市の南東に Epiphania なる地区をもうけ、これでヘレニズム時代の市街が出来上つた。住民はシリア人、ユダヤ人等の isopoly-politeuma とギリシア人市民社会とを構成し、人口は当初五千人余りであつたらしい。町中には相次いでつくられた二つのアゴーラを中心に貯蔵庫、水道、スタジァム、劇場等の公共建築及び有名な Antiochia の Tychē や Zeus, Apollo などの崇拝に関する聖所などあり、個人の家は木造であつたと云われる。市政は、はじめはマケドニア風の長老政治であつたが、Epiphanes の時代にはギリシア風都市として自治が認められ、元老院が市を指導し、王は代官（epistates）を置いて全体を監視していた。又、Libanius の時代に十八あつたと云われる tribe はやはりこのころからの市の行政区であろう。文化的には Antiochus III のころから盛んになり、図書館も建設された。しかし、セレウコス朝末期の古銭の示すところによると、市が王朝から独立し、独立の貨幣を打つたことが分る。

（c）ローマ時代（pp. 143-316）この時期のアンティオキァはローマ人の支配下に入り、ローマ帝国成立と共にその中で栄えて行く一方で、キリスト教が市内に拠点をきずき、異教との対立と教内で

の紛争とをかゝえながら発展するのである。ローマ人はセレウコス朝以来の同市の自治都市的立場をうけついで、ローマ帝国の東半分の首府としてくみ入れられ総督がおかれた。Augustus 帝以後、ローマ帝国の安定するにつれて、それ以後数百年間にわたつてつゞくアンティオキァの位置がはつきりしはじめた。即ち、第一が東方ペルシア人に対する防衛拠点又は遠征本部としての役目、第二はローマの東方交易の一大中心地としての役目の二つである。但し、本書では後者についてはなはだ不充分にしか触れていない。Augustus, Agrippa, Tiberius 等は東方政策上この町の安定に努め、城壁や中央大路を整備し、更に新たに斗技場、劇場、浴場、神殿等をつくつた。以後、この市はパルティア人が進出するたびに皇帝をむかえ、地震火災の時は下賜金によつて復興し、叛乱に加担して破れる場合は自治権或はその他の持権（ゲームなど）を停止される（例えば Trajanus, Marcus Aurelius, S. Severus 等の治世）と云う歴史をくりかえした。キリスト教はユダヤに最も近いこの国際都市でいち早く拠点を築くことに成功し、Ignatius, Theophilus, Babylas 等の著名な聖者を出している。主な出来事或は問題として（i）制度としてのキリスト教会の記源（ii）ペテロは初代司教であつたかどうか、（iii）ニコラウス派、グノーシス派或は Samosata の Paulus 等による異端のこころみ、（iv）異教市民又はローマ皇帝による迫害（v）253,260 両年におけるキリスト教徒のペルシア捕因等がある。Downey の記述はまず皇帝の即位の事情をのべ、それがアンティオキァと関係ある場合、又皇帝が同市に来た場合には詳しくその経過を記し、次にその皇帝治下におけるアンティオキァの出来事を述べると云う順序のくり返しである。

（d）キリスト教帝国時代（pp. 317-578）. この部分は著者の最もよく調べたところである。まず、Diocletianus 帝時代に於ける市街の最終的整備（川中島に豪華な大宮殿、市内に対ペルシァ戦争に備えるための武器工場、食料庫、その他に造幣所、浴場等）についてのべる。三一三年キリスト教公認の勅令と共にキリスト教会の動きが表面化し、敍述もローマ皇帝とアンティオキァ司教とを中心とする二つの編年誌の交互する形をとる。アンティオキァの町はこれ以後第一に対ペルシアの拠点として、第二にキリスト教のひき起す教会内外の紛争の一つの目として考えられる。この場合、まず表に出るのは Diocletianus 帝及び Constantinus 帝の時代の財政、法制上の中央集権化が町にどのように作用しているかであつて、Downey はこの点についてまとめて論じてはいないが、アンティオキァのこれ以後の没落史にはそれが深く作用している。三三五年 Constantinus 帝は東方の軍事情勢を考えて、当市に新しい役人を置くことにした。これが以後アンティオキァの市政で皇帝の代行者としての役割を演ずることになつた Comes orientis でる。この役目は本来文官であつて、司法・行政にたずさわる一方、軍隊の食料、宿泊所の世話等もひきうけた。位階の上ではシリア総督 Consularis Syriae より上、praetorian prefect よりは下にあつた。しかし乍ら、市民の間には物質的にも精神的にも独立の共同体意識がつよかつたのであつて、皇帝の役人や増大する軍隊との間

は必らずしもうまく行かなかつた。その大きな原因の一つは地方的或は全東方的な食料飢饉が頻発したことである。アンティオキァに於ては軍隊の駐留が人口増大をもたらし、市民との間で食料の奪い合があり、加うるに市の元老院に席をしめる大商人、大地主が買い占めや投機によつて物価上昇を招き、軍備のためのインフレ政策とあいまつて市民の生活を苦しめた。どの皇帝も不思議に食料政策に放慢であり、大商人の投機をおさえられなかつた。一方、元老院の成員たちは次第に公共的関心を失い、あらゆる方策で強制懲税請負制の重圧からのがれようとした。地方財政が弱体化していたことは事実であつて、農業生産も農民に対する重税の他、洪水、悪天候、役人の私的賦役、キリスト教僧侶団による掠奪、大地主領への農民の吸収等のために低下して行つた。しかし、Tchalenko によるアンティオキァ東方の Belus の発掘はオリーブ栽培が盛んであつたことを示し、アンティオキァはこうした生産物の取引地として、又消費地としてかなりの水準にあつたらしい（Zeno 及び Justinianus 時代）。しかし、この Tchalenko 説と上述のような Downey の文献的研究の結集とは、Starr の云うとおりよく調和しているとは云えない。このような中で Constantinus 帝以後、Valens, Theodosius, Justinianus 等の諸帝が町の建設に寄与したが、相次ぐ大地震（特に五二六年のもの）やペルシア人の掠奪（特に五四〇年）や大火（五二五）やアラビア人の掠奪（五二三、五三一）、更には疫病、暴動により破壊と滅亡の兆候が多く、人口も五二六年の大地震以後は四散しはじめた。六三七・八年のイスラムによる征服の際、この市は何等抵抗を示さなかつたらしく、Downey は五四〇年のペルシア人による掠奪でヘレニズム都市としてのアンティオキァ市は終つたものと看做している。この期のキリスト教界はアレクサンドリア、アンティオキァに加えて、三八一年から東方の首教会所在地となつたコンスタンティノプルとの三都市を中心に発展する。主要な人物としては Lucianus（アンティオキァの教理学校創立者）をはじめ、Arius 派聖職者たちの他、Nestorius, Johannes Chrysostomus, Simeon Stylites 等がある。これ等のうち、Arius 派問題、Nestorius 派問題、単性論者問題が主要な歴史的争点であつた。Arius の異端に Nicaea 公会議で一応の線がひかれると、次はキリストのペルソナについてその本性は人か神かと云う問題で対立が起つた。四五〇年の Chalcedon 公会議で正統派の信条として、一のペルソナ、二つの本性と云う主張が打ち出されると、それに対してシリアやエジプトの神学者の多くはキリスト単性説を説いてゆずらず、それが東方属州における反ローマ帝国的、地方的なナショナリズムと結びつくことになつた。このため、アンティオキァの教会は皇帝派と単性説のナショナリストとに分裂し、それが更にサーカスの徒党や宮廷陰謀と結合し、市内の混乱をひどくした。この期間に出た二人の傑出した人物はヘレニストの Libanius とキリスト教徒の Chrysostomus であつて、それぞれアンティオキァの文化に貢献している。

（四）書評中に見られる問題点

本書の書評（Oost と Starr による）を見ると、第一に綿密で

信頼のおける敍述・推論が賞讃されており、専門家にとっても知識の豊庫である（Starr）と云われている。Downeyはこのように長期間にわたる一つの都市の歴史を書くに当って、直接関係のある文献のみならず、各時期、各問題に関する一般的な著作をもよく読んでおり、StarrやOostの評言にも、誤った歴史評価を与えていると云う非難は殆んどない。質的にことなるあらゆる問題について言及し、しかも現在の通史の標準を保つには大きな努力が必要であったと思われる。その代り、未解決の問題についてはさゝいな説までもち出した上、解決をつけないうちに次の時代のテーマにうつることがあるのも止むを得ないであろう。しかし、二人の評者の共通に不満とする点は、著者のやゝ旧式なヒストリオグラフィーであって、Oostはうるさく云えばこの本は歴史と云うより、Antiquitates（古誌）であり、Müllerの方がこの町についての証拠の性質をよくわきまえていた、と述べ、事実の決定の他に、諸出来事の内的な意味を理解することを歴史の条件とすれば、この本は歴史書ではない、と主張している。

Downeyが使用した現代の古代史学の諸代表作のおかげで、このような内的な意味はMüllerの時代よりもはるかによく我々に理解され得るとは云え、Downey自身の側で、アンティオキア史についてそのような内的な理解のための努力が払われず、余りに編年誌的であるのは事実である。著者自身は「アンティオキアについて知られるあらゆること柄の摘要を意図するものではない」と云うが、内的な意味の把握が弱いためにStarrの云う通り「多くの主要問題の真にほりさげた総括」が出来ていないと云う点は大きな欠点である。即ち、本書は編年史形式の事件の羅列に終り、史料の内的意味の分析が不充分である。又、同じような偉大なヘレニズム都市であったアレクサンドリアの歴史との比較も必要であろう。Oostは結論として、本書は「偉大な本とは云えないが、よい本ではある」と述べている。

（五）　姉妹篇について

本書の出版から二年の後、“Ancient Antioch”と云う題の縮小版が同じ出版社から発行された。本文は本書の五七八頁に対して、三〇〇頁ほどへらしてあるが、その代りにモザイクの写真版が多数掲載され、その他にも図版・地図が若干つけ加えられている。全く新しい章は、プロローグ（「歴史におけるアンティオキア」）とエピローグ（「アンティオキアの遺産」）、及び上記の第十章（「東方の華麗なる冠」）である。